英語劇の上演と大学教育への応用

日　髙　真　帆

1. はじめに

京都女子大学文学部英文学科では2010年度にカリキュラム改革を行い、その一環として英語劇上演に取り組むプロダクション形式のゼミやパワーポイント等を使用して研究発表を行うプレゼンテーション形式のゼミを導入した。2012年度にはこの新カリキュラム下での3年次生を対象として新形式のゼミが始動した。

本稿では、特に本学文学部英文学科のプロダクション・ゼミを念頭に置き、以下の点を考察したい。まず、本学文学部英文学科の新カリキュラムに於けるプロダクション・ゼミでの演劇教育の実践報告を行い、次に、英語劇上演のための教育内容の諸側面について論じる。その上で、大学教育に於ける英語劇の上演の意義について考察し、今後の課題について検討することとする。

2. 新カリキュラムに於ける演劇教育の実践報告

演劇の手法を応用した教育には多様な形があるが[1]、その中でも特に、英語劇

＊　本稿は2012年10月27日に京都女子大学で開催された京都女子大学英文学会2012年度大会に於ける口頭発表「英語劇の上演と大学教育への応用」を基にしたものである。

1　例えば、 Michael Bryam and Michael Fleming, ed., *Language Learning in Intercultural Perspective: Approaches through Drama and Ethnography* (Cambridge: Cambridge UP, 1998) や Alan Maley and Alan Duff, *Drama Techniques in Language Learning: A Resource book of Communication Activities for Language Teachers* (Cambridge: Cambridge UP, 1978) を参照。

の上演という形でカリキュラムの一環として取り入れている大学は日本では未だに数少ない。そのような状況にあって、本学で2010年から開始した新カリキュラムにより、卒業制作として英語劇の上演が導入された。これは、具体的には、必修科目である3年次前期の専門演習I、3年次後期の専門演習II、4年次前期の卒業研究演習I、4年次後期の卒業研究演習IIを通して取り組む卒業研究の成果発表の一形式として位置づけられるものである。通常「ゼミ」と呼ばれるこれらの授業は、現在英文学科で十クラスずつ開講されており、担当教員の専門領域に応じて英語学や英語教育から英米文学や演劇に至るまで様々な分野の卒業研究が展開されている。それらの成果発表は、従来、英語の卒業論文という形で行われていたが、現在では卒業論文に加えてプレゼンテーションやプロダクションという様式が加わり、学生は多様な発表様式から自身の卒業研究発表の様式を選択することが可能となった。但し、プレゼンテーションやプロダクションを行う場合にも、卒業論文を全く書かない訳ではなく、卒業論文のみを選ぶ場合よりは分量は減るものの、文字媒体でも成果を纏めることが求められている。これらの成果発表は全て英語で行われるものであり、今回取り上げる英語劇の上演は「プロダクション」に該当する。

通常卒業論文は個々人が各自のテーマに応じて取り組むものであるが、このプロダクション・ゼミの卒業制作では、一つの演劇作品にゼミ生が一丸となって取り組み、4年次後期末に英語劇の公演を行うことになっている。但し、その取り組みと関連した卒業論文のテーマとしては、各人が個々にテーマ設定できることになっている。例えば、ミュージカル作品『ウエストサイド・ストーリー』（*West Side Story*, 1957）の原語での上演にゼミの卒業公演として取り組んだ場合にも、個々のゼミ生は、『ウエストサイド・ストーリー』や演劇上演に関する異なるテーマを設定して英語で卒業論文を書くことになるのである。

公演への関わり方自体、キャストやスタッフとして多様な役割があるため、一つの作品に取り組むものの、学生個々人の経験も各自の関心事や技能を反映した多様なものになり、そのことがまた、卒業論文の多様性にも繋がるのである。具体的には、キャストは作品によって当然老若男女様々な登場人物がおり、

場合によっては一人二、三役を演じる場合も生じ得る。スタッフも音響、照明、舞台美術、振付、衣装、道具類、字幕、ポスター・プログラム等のデザイン等の担当に細分化されており、オーディションや各自の関心・技能によって役割分担が決まることになる。

3. 英語劇上演のための教育内容の多様性

それでは、大学教育の一環として実際に英語で演劇を上演するに至るまでには、一体どのような教育が必要なのであろうか。ここでその多様な教育内容について具体的に考察したい。

まず、使用言語が英語であることから、当然英語教育的側面での教育が必要となる。具体的には、リーディング、リスニング、スピーキング、ライティングの所謂四技能に加えて、字幕制作を行うための翻訳指導が必要となる。英語のミュージカル上演を念頭に置いて、それらの各要素を個別に見てみよう。

まず、リーディングとしては、台詞や歌詞のみならず卜書きを含む英語の上演台本の読解が必要となる。卜書きの読解に慣れていない学生もいるため、戯曲の構成そのものから解説を行う必要がある。また、ミュージカルの場合には、単なる台詞のみならず、歌詞の部分も頻出するため、その読解にも取り組む必要がある。

次に、リスニングとしては、演劇や映画作品の視聴覚資料を通しての学習が必要となる。英語のミュージカル作品の場合、舞台公演の録画は入手しにくい場合が多いが、曲集や映画化作品については視聴覚資料を入手できる場合も間々ある。これらは、出演する学生が発音や表現力を学ぶ上で貴重な資料となる他、字幕制作の学生が字幕を切り換えるタイミングを摑む上でも大いに役立つ。舞台公演に際して各台詞や歌詞の字幕を映写する場合には、舞台の台詞や歌詞を聴き取って字幕をある台詞や歌詞から次の台詞や歌詞へと切り換える必要があり、原語で聴き取ることでそのタイミングを摑むことになるからである。

次に、スピーキングとしては、英語の発音指導や各登場人物や各場面の台詞

や歌の指導が必要となる。アクセントやイントネーションを含む多様な表現の指導も重要である。発音指導の際には、各登場人物の英語のアクセントにも細かく注意する必要がある。『マイ・フェア・レディ』（*My Fair Lady*, 1956）の主人公イライザ・ドゥーリトル（Eliza Doolittle）のように、ドラマの展開と共にアクセントが根本的に変化する場合もあり、各登場人物のアクセントを細部まで確認する必要がある。一言に「英語劇」と言っても、実際には使用される「英語」の多様性を十分に把握する必要があるのである。

更に、本学文学部英文学科での公演のように、英語劇の上演に日本語字幕を付ける場合には、翻訳についての指導も行うことになる。単に意味内容を正確に汲み取ったり各登場人物の口調を自然な日本語に訳したりするだけではなく、どこで台詞や歌詞を区切り、一つの字幕から次の字幕へと切り換えるべきかについても、観客が読み取れる分量を考慮しながら仔細に検討することになる。また、本学科での取り組みのように卒業制作に関する卒業論文の執筆も求められている場合には、卒業論文に関するライティング指導も必要となる。

このように、通常はリーディング・クラスやライティング・クラスといったように分化されることも多い英語教育の諸側面を、総合的に教育内容に盛り込む必要があるのである。その際、各技能間には無論関連性も強く、相互補助的に指導を行う配慮が必要となる。

以上のような英語教育的側面に加えて、作品分析や作品背景の理解や翻訳に対する理解を深めるには、英文学研究や演劇研究、翻訳研究や比較文学・比較文化研究等の専門的研究方法の指導も必要となる。その際、舞台上演を念頭に置いた戯曲研究や舞台制作の諸側面や制作過程に関する研究も重要となる。そしてそれは、上演する際に役立つのみならず、卒業論文の基盤にもなるものである。

更に、教育活動の一環として英語劇を上演する上で重要な教育的側面として、実技指導が挙げられる。これは、英語のミュージカルを上演する場合、英語教育、演劇教育、そして音楽教育を複合したものとなる。また、舞台経験を積むことが何より重要となる。演技指導の際には、台詞回しのみならず身体表現に

も多様性が求められる。また、音楽的要素については、歌や伴奏の指導を行う必要がある。演劇教育としては更に、照明や音響、舞台美術等、演劇上演の際に必要となる諸側面についても個別の指導が必要となる。照明や舞台美術は上演ホールの設備によって工夫することが肝要である。履修生の舞台経験次第では、リハーサルの進め方や種類についても仔細に説明する必要が生じる。

以上、大学教育の一環として英語劇の上演を行うに際しての教育内容の諸側面について概要を述べたが、実際には夫々の側面について更に細かい指導が必要となっていく。それ故、舞台制作を充実させるためには、実際の教育現場に於いて諸側面のバランスの取れた指導とそれらに見合った十分な指導時間とが必要となるのである。

4. 大学教育に於ける英語劇上演の意義

それでは、このような英語劇の上演を取り入れた大学教育には、どのような意義があるのだろうか。第一に、英語教育の多様化と実践的指導の充実化、という点が挙げられるだろう。パフォーマンスや字幕制作といった実践的な取り組みにより、従来型の英語教育で不足しがちな部分を補完することができるのである。

第二に、グループワークをベースにした学習形態により、個々人の読解力やリスニング力のみならず、対話を前提とした表現力やコミュニケーション能力も高めることができる。これは、コミュニケーションを基にしている演劇を外国語教育に生かす重要なメリットの一つである。

第三に、第二点目と関連することであるが、総合的舞台芸術としての演劇に対する理解を深めることができる。即ち、台詞やト書きに書かれていることを実際に三次元の世界として創り上げるために、音響・照明・舞台美術・衣装等様々な面でのスタッフワークも経験し、通常の大学授業では余り経験することのないコラボレーションを通して学びながら、演劇の制作過程と観客を前にしての舞台公演を体験できるのである。

また、ミュージカルに取り組んだ場合、英語表現と結びついた音楽性やリズム感を身につけることができる。音楽やダンスの要素も多分に加わるため、学生の多様な才能を生かすこともできるのである。

更に、作品分析や作品背景等の研究も進めることにより、英文学研究や演劇研究、比較文学・比較文化研究についても学ぶことができ、英文学科に相応しい専門性を培うと共に、理論と実践の両面を通して演劇への理解を深めることができるのである。

5. 結語

英語劇の上演を大学教育に応用する際には、無論母体の特徴により課題が異なってくるが、本学の場合は、英文学科のカリキュラムの一環として位置づけられ、英語による卒業論文の執筆とも連動していることから、英語教育や、英文学及びその関連分野の専門教育との連携性を重視することが不可欠となる。本学文学部英文学科で現在行われている英語劇上演のための指導は、基本的に既述の3年次前期の専門演習I、3年次後期の専門演習II、4年次前期の卒業研究演習I、4年次後期の卒業研究演習IIを通して行われるものであるが、現状では一週間に一コマのみ開講されているこれらの授業時間では、上記のような多様な教育内容を到底網羅し切れない。そのため、既に一部始めていることではあるが、今後は近接する関連科目との間に更に連携性を持たせることで、総合的な教育内容の充実化を図ることが重要である。その際には、卒業研究に従事する3、4年次のみならず、1、2年次にも上級年次での専門的学習に繋がる授業を展開できるよう、関連科目での講義内容にも配慮したい。今後の課題は無数にあるが、一つにはそのような創意工夫を凝らすことにより、総合舞台芸術としての演劇公演を英語で行うというユニークな取り組みを通して、より長期的且つ多面的に、演劇への理解を深めると共に相互補助的に実践的英語力を高められるような体制作りに聊かなりとも貢献できるのではないだろうか。

引用文献

Bernstein, Leonard, Stephen Sondheim. *Vocal Score: West Side Story*. Milwaukee: Hal Leonard.

Bryam, Michael and Michael Fleming, ed. *Language Learning in Intercultural Perspective: Approaches through Drama and Ethnography*. Cambridge: Cambridge UP, 1998.

Lerner, Alan Jay. *My Fair Lady: A Musical Play in Two Acts*. London: Penguin, 1959.

Maley, Alan and Alan Duff. *Drama Techniques in Language Learning: A Resource book of Communication Activities for Language Teachers*. Cambridge: Cambridge UP, 1978.

Shakespeare, William, Arthur Laurents. *Romeo and Juliet / West Side Story*. St. Louis: Turtleback, 1999.